



津城かわら版② 富田氏とその時代の津城

偶数月の16日号でお届けする「津城かわら版」。2回目の今回は、戦国時代末期の城主であった富田氏とその頃の津城について紹介します。

津城を築いた織田信包は、文禄3(1594)年に近江国(滋賀県)に転封(領地替え)となり、翌年に富田知信・信高父子が豊臣秀吉から5万石を下賜され安濃津城に入りました。しかし、秀吉の死後はその家臣である石田三成への反感もあり、父子は徳川家康に接近しその信頼を得ます。

富田氏は、その治世下で津の町に対し伝馬(宿場の仕事)以外の負担を免除し、津の住民との良好な関係を築いています。父の知信は慶長4(1599)年まで津の町の統治を担い、それ以降は信高が治めました。

慶長5(1600)年、会津の上杉景勝の挙兵に対し信高はその征伐軍に参加しますが、三成による謀反の報を受け、下野国小山(栃木県小山市)からの帰国の命が急きよ、家康から下ります。居城の守りを固め西軍に対処するためでした。

津に戻った信高は、伊勢上野城主の分部光嘉や津の町の住民と共に城に立てこもりました。これが関ヶ原の戦いの前哨戦である「安濃津城籠城戦」です。西軍3万余の軍勢に対し、2,000人に満たない軍勢での戦いは、四方からの激しい攻撃に耐えながら



安濃津城籠城戦之図

も、ついには開城に至ったとされています。

この籠城戦の逸話として後世に伝わるのが信高夫人の活躍です。浮世絵「安濃津城籠城戦之図」に描かれた鎧をつけ薙刀を手に勇敢に戦う姿は、幕末津藩の儒者である津坂東陽が著した「武家女鑑」にも美談として収録されています。

安濃津城開城後、信高は一身田の専修寺へ入り、その後剃髪して高野山へと移ります。その後関ヶ原で東軍が勝利すると、信高は2万石を加増されて再び安濃津城に戻り、津の町の復旧に努めたといわれます。しかし、町は戦後の荒廃が激しく、本格的な復興は慶長13(1608)年の藤堂高虎の入府を待たなければなりません。

富田氏時代の津城は、前代の城を引き継いだと考えられますが、その様子が分かる絵図などの資料は確認されていません。後の戦記に、塔世山からの砲撃で楼櫓が破碎されたと記され、戦国期の城郭としての構えを有していたことが分かっています。

家康からの論功行賞により5万石を加増され、12万石の大名として伊予宇和島に移った信高は、その後数奇な運命をたどります。家門の不祥事をきっかけに、その領地は没収されて陸奥国岩城(福島県いわき市)に閉居を命ぜられ、寛永10(1633)年に同地で没しました。

◆ 次回の「津城かわら版(広報津10月16日号)」◆
藤堂高虎の入府と津城大改修

「津城跡」に関する市民の皆さんのご意見を受け付けています。詳しくは津市ホームページをご覧ください。

